(川辺郡雄和町字平尾鳥の)沢の奥へ入ると「善知鳥」部落がある。仙北郡千畑村にも同名の部落があって、隠れキリシタンと、南部の沢内村へ越える関所で知られている。「ウトウ」の語源は海へ浜が突き出た所という。

1988年 ぬめひろし著 地名譚

うとう　善知鳥村〈峰浜村〉

〔中世〕戦国期に見える村名。出羽国檜山郡のうち。天正19年1月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行を安堵した朱印状写に、「うとう村・田中村」82石とあるのが唯一の史料（秋田家文書）。朱印状写の字体は定かでなく、「秋田県史」では「うとり村」と読むが、同状には米代川沿いに位置する別個の大村である鵜鳥村も記すので、田中村と並記された当村を今は「うとう」と読んでおく、塙川北岸の田中村から北接の水沢村へ通ずる台地越えの脇街道があり（正保国絵囲）、ウトウ坂という。「ウトウ」はアイヌ語で突起を意味し、北奥羽には善知鳥安方の伝説と地名が広範囲に分布する。当村の地名もこれによるか。

なお記載の石高はほとんど田中村分と推定される。檜山郡内には金光寺付近にうとう坂、朴瀬にも宇藤坂・宇藤台の小字があるが、当村は田中村に近接の村とみておく。

1980.3出版　角川日本地名大辞典5　秋田県

うとう　善知鳥村（千屋・六郷東根）　鵜鳥村（能代市）

〔中世～近世〕戦国期から見える村名。出羽国檜山郡のうち。西流して米代川に注ぐ鵜鳥川流域一帯に比定される。天正19年正月吉日、豊臣秀吉が秋田実季の当知行地を安堵した朱印状写に、田中村と併記され「うとり村」82石余とあるのが初見（秋田家文書）。戦国期を通じ安東氏領。天正末年、秋田実季は知行制を整備して支配を強化。文禄元年の「秋田家分限帳写」では、当村96石余が大高甚助代官所支配（同前）。慶長6年の「御代官所之帳」でも同じ。

近世、秋田藩政下では慶長・元和の頃独立村であったが，その後鶴形村の枝郷となる。「享保郡邑記」では戸数4軒。

1980.3出版　角川日本地名大辞典5　秋田県

うとうがわ　善知鳥川〈千畑村・六郷町〉

仙北郡千畑村・六郷町を流れる川。岩手県境の真昼岳（1、030m）・女神山（956m）を源とする向沢・浅沢・水沢の3沢が合して善知鳥川となり、谷底平野の雷電河原を形成。さらに千畑村善知鳥から南流し、六郷町妻ノ神で丸子川に合流する。流路延長6km。上流の岩石は男鹿半島に次ぐ多様さを持ち貴重な標本をなしている。向沢～水沢間の尾根は「松坂道」といい、かつてキリシタンの山越えの道でもあった。

秋田藩は麓の善知鳥に番所を置いて、秋田と南部藩を往来する人々を取り調べ、食糧・物品の交易も規制した。ここで捕えられた13人のキリシタンは、寛永元年横手で斬首されている。

関守レイス大津三郎衛門は一時転宗したため、佐竹義宣はこれを逆用して彼を吟味に当たらせたが、後に逮捕され、処刑されたという。

1980.3出版　角川日本地名大辞典5　秋田県

善知鳥

名前博士？と呼ばれた佐久間英の著書（沢山ある）に、いろいろな読みにくい姓や珍しい名を列挙していた。それに掲載されていない姓で、「善知鳥」という女性が前の勤務先にいた。もう20年以上前だった。「うとう」と読む。

「善知鳥」という題の能の曲があることは新聞のＴＶ欄で見て知っていたが、どう読むかは知らなかった。多分「うとう」と読むのだろうし、この読みは謡と関係があるのだろうと想像していた。

あるきっかけで、昨日広辞苑を「うとう」で引いてみたら「善知鳥」と漢字がついていた。「善知鳥」の読みを知らない人は多いらしいが、漢字から探すのは困難でも、読みが判れば辞書を引くのは容易だ。

広辞苑によれば、ウトウはアイヌ語で突起を意味するそうだが、ウミスズメ科の鳥だとある。野